

車窓を楽しむ鉄道の旅 その7
ひたちなか海浜鉄道湊線

茨城方面へ登山や小旅行をすることが多くなり、県下の地図を眺めているうちに気になった鉄道。

常磐線の勝田駅から阿字ヶ浦に向かう「ひたちなか海浜鉄道 湊線」。

開通は1904年で、当初は勝田村武田と平磯を結ぶ湊鉄道という軽便鉄道だったが、1928年に勝田・阿字ヶ浦間が全通した。湊鉄道という会社は後に茨城交通となり、県下の交通機関を押さえる主力企業となったが、湊線は赤字経営が続き、「茨城交通は不採算事業から撤退」ということになり2005年に廃線の方向が打ち出された。

ひたちなか市と茨城交通が出資する別会社を作って第三セクター方式で起死回生を図ることになり、廃線計画が撤回された。「ひたちなか海浜鉄道湊線」としての再出発は2008年4月。

各地に点在する小規模鉄道が抱える問題と同じで、モータリゼーションが急速浸透した上に、人口減少・産業構造激変・バブル崩壊のような事態が加わって、危うい橋を渡り続けているのではないかと思う。



平成 31 年 1 月 28 日

いつものように、8時26分 八千代台駅からモーニングライナーで日暮里へ。

常磐線は9時16分発の勝田行。新聞を読み、車窓を眺めたり、居眠りをしたりしているうちに筑波山が見えるところまで来てしまった。取手を過ぎて岩間あたりまでは、筑波山とその周辺の山脈が様々な形を変えて、車窓の旅を飽きさせない。土浦から高浜あたりまでは水田の間に蓮田が点在しており、「レンコンの里」を感じさせる。

勝田着11時28分、水戸駅で殆どの乗客が降りてしまい、終着駅勝田では僅かの人しか降りなかった。まずは「ひたちなか海浜鉄道湊線」の乗り場を確かめることにした。常磐線の線路脇にちょこんと立つ小さな駅舎を確認したついでに、駅員に「今の季節、阿字ヶ浦で食事出来るところはないでしょうね」

と尋ねたら、「そうですね、ここで食べてからいらっしゃる方が良いでしょうね」と返ってきた。

駅の西側は広大な日立の工場、東側には町が広がっているが、人通りがなく広い駅前広場と直線の道路とが寂し気だ。(右画像)



まだ昼食には早いせいか「準備中」という表示の店が多かったので、駅前の一角をぐるっと回ってみた。歩いている内に妙案が浮かんだ。「駅前食堂でカツ丼を食べてみたい」。

古くからあるような風情の駅の真ん前にある食堂、ショーケースをのぞき込んだらカツ丼があった。

湊線の駅に入り、乗車券を求めようとしたら「往復割引券 (900 円)」を勧められた。



勝田駅 12 時 40 分発阿字ヶ浦行、一両編成のディーゼルカーはあの独特の轟音をあげて発車。常磐線に沿って南に直行の後、左にカーブして南東に向かうようになると最初の停車駅の**日工前** (にっこうまえ)。

常磐線との間に挟まれた扇形の日立工機の工場と、その先に自衛隊の駐屯地。湊線の東側には学校・病院・商業施設などが点在する中に住宅街が広がっている。おそらく城下町「日立村」なのだろう。

しばらく同じような景色が続いた後、景気の良さそうな名前前の駅に入った。**金上** (かねあげ)。

戦国時代末期に、税の取り立て役をしていた金上弾正の居城があったのが地名の由来らしいが、何となくわざとらしさを感じる。旧勝田村は、明治時代に三反田 (みたんだ) 村・金上村・勝倉村・武田村が合併して出来た村で、主な村の名前から文字を取って勝田村と名が付いたらしい。

金上駅を出ると南側の車窓から自衛隊が消えて、その代りに住宅地が広がってきた。小さな雑木林を抜けると北側の景観も一変して、区画の大きな田圃の連なりに変ってきた。これが三反田 (みたんだ) という地名の由来なのかもしれない。中丸川の流れに並走して行くと、東水戸自動車道の手前の**中根**駅に入った。鎌倉時代中期に、この地を中根郷と言ったことが古文書上で明らかになっているらしい。駅の北東部には 7 世紀初頭に造られた虎塚古墳 (前方後円墳) や横穴墓群がある。

東水戸自動車道の下を潜り抜けてさらに南東へ一直線。北側を並走している中丸川が右にカーブするため、否応なしに渡ることになる。鉄橋 (中丸川橋梁) を渡り国道 245 号線を潜るところに、**高田の鉄橋** という風変わりな名の駅がある。付近に柳が丘団地ができたことにより 2014 年に開業した新しい駅。正式駅名が決まる前の暫定駅名は「柳が丘」と言っていた。その昔、この辺りの地名 (字名) が「高田」だったことから、この鉄橋のことを地元の人達は「高田の鉄橋」と呼んでおり、それが定着していたので、新駅開業にあたり正式駅名として「高田の鉄橋」が採用された。駅名命名の経緯が単純ではないところが面白い。

中根駅から線路の北側に広がっていた大きな区画の田畑が消えて、車窓の右も左も住宅地になってきたのに驚いていたら**那珂湊**駅。1994 年に、日立関係を中心とした工業の町勝田市と水産業と農業の町那珂湊市が合併してひたちなか市が誕生した。個人的には那珂湊という地名は重厚な感じと水産業を中心とした町らしい名前が好きだった。ひらがなの名前の市が全国的に増える傾向にあるが、浮薄な感じであまり好きになれない。結果として、那珂湊という地名は消滅してしまい駅名だけが残った。

那珂湊駅を出ると、海岸線の形状通り左に大きくカーブして進路を北東に取るようになる。地図を眺めていると、沿線には富士の下・猪谷津 (むじなやつ)・廻り目 (まわりめ) など調べてみたくなるような地名が並んでいる。

殿山、海岸線は段丘のようになっており駅周辺は海拔 18m ほどの高さ。付近に「山」のようなものは見当たらず、地名の由来もわからない。車窓から見える畑はシーズンオフで何も植わっておらず、主たる農作物が何かわからない。じっくり観察してみると、殆どの畑が砂地のようなので、砂地に強い作物を作っていると思われる。北東に向かう列車は、海岸線に 180m 程の所まで近づくと北に向きを変える。線路は海拔 18m、海岸線の道路まで標高差 13m の斜面に住宅地が並ぶ。

さらに 600m ほど北上しながら海拔 24m まで上れば**平磯**駅。

「平らな磯」、何となく海岸の地形が想像できる地名だが、アイヌ語の「ピラ(崖状の土地)」「イソ(磯)」が由来だとする「蝦夷(えみし) 由来説」もあるらしい。これを説く方の論によれば、このあたりには「蝦夷由来説」を思わせる地名が多数あるらしい。

進路を北北東に取り一直線に進むようになると、左右の車窓に大きな区画の畑が広がって来る。これも何を作る畑なのか気になる。

畑のど真ん中に立つ墓石群が独特の風景を作っているのに見とれていたら、磯崎駅になった。

この地名も海岸線の形状からきているものと思われる。海岸線の南(平磯側)には中生代白亜紀層があり、北側(阿字ヶ浦側)には酒列磯前神社(さかつらいそさきじんじゃ)がある。

磯崎から平磯にかけての海岸線には東に40度ほど傾いた岩礁が露出しており、これを「神が降臨した所」として神磯と名付けて崇めてきた。アンモナイトの化石が多数発見されていることも合わせて中生代白亜紀(約7500万年前)の地層であることが裏付けられたとのこと。

酒列磯前神社の起源は856年に遡るもので、「磯崎」の地名にもつながるものようだ。大洗の磯前神社も同じ由来に基づくものらしい。



磯崎を出ると一旦左にカーブした後再び北上する。この間も線路に沿って西側に広大な農地、東側に住宅地と見事に色分けされたような景観が続く。終着駅の阿字ヶ浦は、想像していた景色とは大幅に異なっていた。さほど広くもない駅前広場の他には民家が建ち並ぶだけで、お店も一軒もない。(左画像)「東洋のナポリ」を標榜する海水浴の町は、海水浴シーズンでなければ「普通の人が普通に暮らす普通の集落」のようだ。

阿字ヶ浦という地名の由来は、沖合にある幅二間余りの方形の岩礁(別名:清浄石・護摩壇石)が、五輪塔の最下段の「阿字石」と似ていることから、弘法大師がこの地を訪れたときに「阿字石」と名付けたことに由来すると言われている。「阿」は梵字の初頭の文字。阿字ヶ浦の由来となった清浄石がある場所は、磯崎駅の南東海上にある。つまり、「阿字ヶ浦」と名付いた海岸は磯崎・平磯の海岸を指し、阿字ヶ浦駅付近にある海岸は「阿字ヶ浦海水浴場」ということのようにだ。



(左画像:清浄石つまり阿字石・平磯館 web から借用)

誰もいない阿字ヶ浦駅から地図を見ながら駅前の道を海に向かって歩いて行くと、木々がこんもりした小さな固まりの中に神社が建っていた。神社の名前は堀出神社。寛文3年(1663年)に酒列磯前神社を挟んで二村の境界論争があり検地を行っている時に、多数



の発掘品があり、それらが酒列磯前神社の本体であることが判明し、ここに社殿が造営されたという。神社の前の道を進むと、道は急に下り坂になり、その先に太平洋が見えてきた。海岸段丘地の末端から海に向かって下っていくと砂浜が広がる阿字ヶ浦海水浴場。

数多く立つ民宿の看板・旅館・ホテル等は季節が変れば営業もしていない様子だし、良く見ると休業か廃業かしたような荒れ果てた建物もある。震災の被害だろうか砂浜はやや砂が流出気味の状態で、おまけに冬で人がいないことも手伝って寂しげな感じだった。「東日本大震災復興事業」と銘板が打たれた防潮堤が途中で切れているのが気になった。しばらく海岸線を散策した後、往路とは別な道から段丘地に上がり阿字ヶ浦駅に戻った。

ちょうど阿字ヶ浦発13時59分の列車が入ってきたところだったので、待ち時間なく乗車することができた。

ちょうど阿字ヶ浦発13時59分の列車が入ってきたところだったので、待ち時間なく乗車することができた。

以上